

2018年度第 3 回「地域の姿と課題 I」

テーマ「指定廃棄物の行方」

2018.6.28

宇都宮大学 陽東キャンパス11号館 1階 AL教室

塩谷町 保健福祉課長

(元指定廃棄物処分場対策班長)

星 育男

① 塩谷町の紹介

塩谷町の面積は176.06 k m²で、約65%が山林原野、東西18km、南北21kmの三角形をなし、栃木県全面積の約2.76%にあたる。

交通は東北自動車矢板IC・上河内SICから約5km、町の中央を東西に国道461号線と南北に主要地方道藤原宇都宮線が交差して、東に矢板市・大田原市、西に鬼怒川温泉・日光の観光地、南に宇都宮市、北に塩原温泉・那須温泉の観光地をひかえており、県北の交通の要所となっている。

町の北部は、日光国立公園の一部で活火山の高原山（たかはらさん・たかはらやま）で、林産資源に富み、河川はいずれも一級河川である荒川（東側）と鬼怒川（西側）が町の両側を囲みながら南流し、中部から南部にかけては肥沃な農業地帯となっている。

土地の最も高いところは、町の最北端高原地区にある釈迦ヶ岳（高原山の最高峰）の海拔1794.9mで、最も低いところは、肘内地区の海拔181mである。

指定廃棄物最終処分場
詳細調査候補地



宇都宮大学

町章



シンボルキャラクター
ゆりぴー



よくキノコと間違われ
るけど『やまゆり』の
妖精!!

町花
やまゆり



町鳥
やませみ



町木
ひのき



② これまでの経緯

平成26年7月30日 午前10時

井上環境副大臣（当時）が突然!! 塩谷町を訪問。塩谷町上寺島の寺島入国有林の一部を指定廃棄物最終処分場の詳細調査候補地として選定した事を一方的に告げられた。⇒正に青天の霹靂

この日を境として塩谷町を取り巻く状況は一変。

東京から多くの報道陣が詰めかけ、山沿いの田舎町にヘリコプターが飛び交い、町始まって以来の騒ぎ。くしくもそれが塩谷町が誕生してから50年を迎える記念すべき年であったことは偶然か。町民の心の中に深くいつまでも残る出来事となったことは間違いない。



正面の川の向こう側が候補地



候補地

候補地のすぐ隣を西荒川の清流が流れています

町民はその日から、詳細調査候補地選定結果の『**白紙撤回**』を求め行動開始。

町の至る所にその姿勢が示された看板が設置された。

それらの力が『**塩谷町民指定廃棄物最終処分場反対同盟会**』という形になり、現在も白紙撤回に向けた住民運動を行っている。

町長も町民の動きを受けて、『**塩谷町の自然を守るためには建設反対**』『**詳細調査断固反対**』という態度を表明。塩谷町の自然を守り、子々孫々の代まで自然豊かで、自然と共生する塩谷町であるように、**町民一丸**となって運動を行っている。



反対同盟会の集会の様子



宇都宮市での1,000人デモの様子



『いんね』は『いない』の意味です

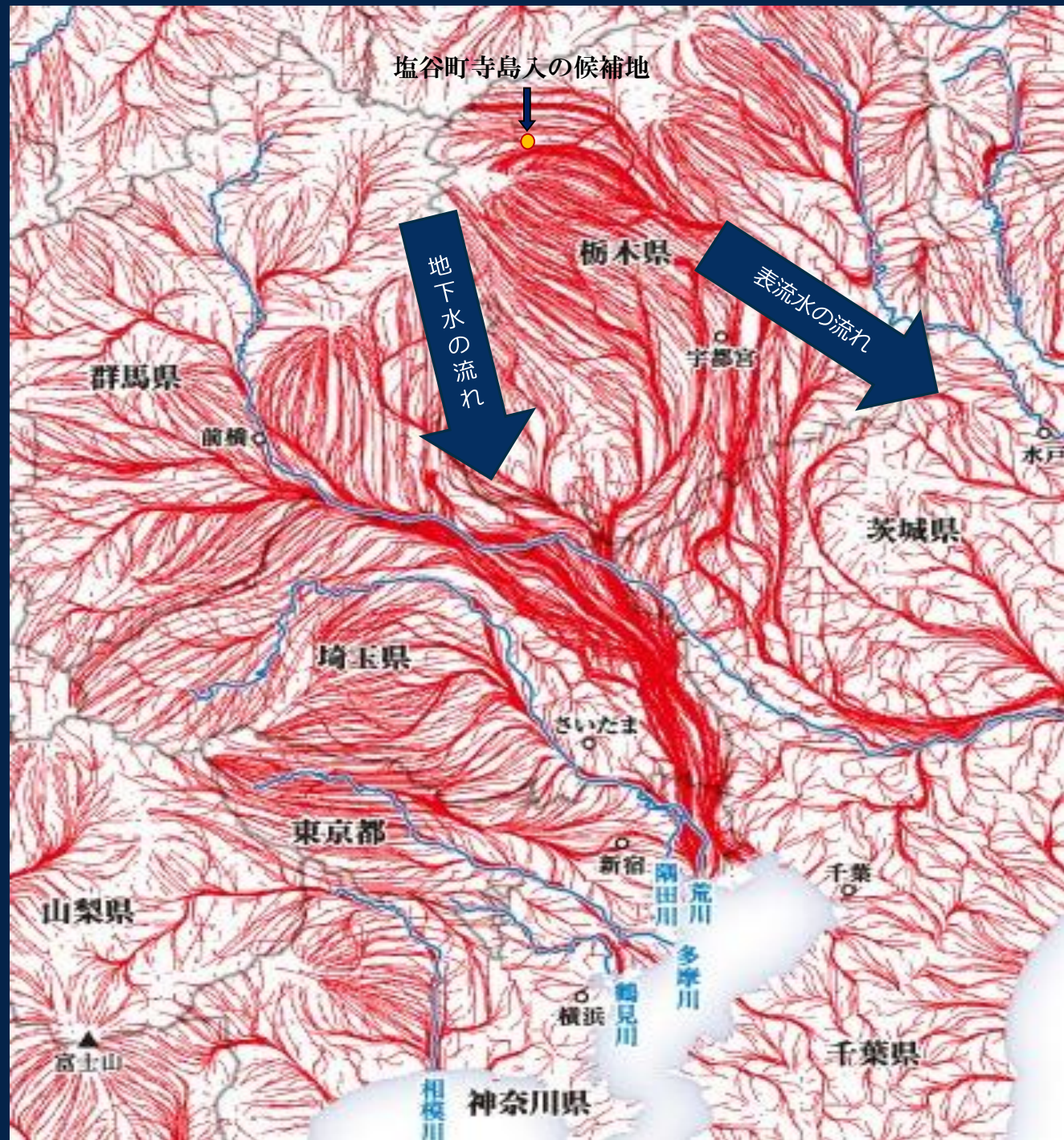


個性豊かな看板がたくさんあります

③ 塩谷町の環境（水）に対する思い、考え

塩谷町は太平洋へ注ぐ那珂川につながる水脈の『源流の町』として、また、東京江戸川に向かう『地下水脈の源の町』として、これまでに幾度の開発計画と戦いながら命の水を守ってきた。

塩谷町の豊富な水を生み出すのは町の北部にそびえ立つ高原山（たかはらやま・たかはらさん）。ここに降った雨が長い年月をかけて吹き出しているのが、全国名水百選に認定されている『尚仁沢湧水（しょうじんざわゆうすい）』で、単独の湧出口としては日本一の湧水量があると言われ、日量65,000トンの水を那珂川水系荒川（※東京都の荒川とは違う荒川です）と利根川水系鬼怒川に注いでいる。



地上の川とは違い、
地下水は候補地から
東京へと向かって流
れていきます。

このあたりです



これらの水を守るために塩谷町と町民はこれまでにいくつもの開発計画を阻止してきた。その一つが林野庁との戦い。ブナの原生林を皆伐し、スギを植栽する計画であったが、天然林が豊かな水を生むことを知っている町民はそれを阻止した。

次に待っていたのが林野を切り開き鉄道用の敷砂利を採る計画。これは相手が民間企業であったため苦労もあったが、どうにか食い止めることができた。町民は山が切り開かれることによって清らかな水を守ることができないことを知っていた。

NO.1 ブナ天然林の伐採事業計画

1979年、高原山南山麓の国有林面積23haを1989年度までに皆伐しスギを植林する事業が、矢板営林署（現塩那森林管理署）で計画された。そこは、塩谷町に残るブナ・ミズナラ等の唯一の天然林で、樹齢100年を超えるものがあった。

塩谷町では当時の町長が中心となり「できるだけ天然林は残しておきたい」と再三にわたり営林署に要望書を提出。しかし、「付近の林業関係者に働く場を与えるため」との営林署の考えで、この工事は1982年5月に着工。

1982年11月にこの工事を阻止するために『高原山の自然を守る会』が発足し、この計画を阻止しようと約700人の賛同者が結集。

1983年1月16日に、中心メンバー20人で現地調査を実施。ブナ、ミズナラなどが丸太となって積まれている状況が確認された。

1983年1月23日に当会を設立し、翌年度以降の工事中止を宮林署に求めた。

その結果、1985年度に伐採を中止することができた。



当時の伐採作業の様子



町民による現地調査の様子

NO.2 大名沢（おおなざわ）の採石採取計画

1995年、高原山南山麓の大名沢周辺の国有林約9.5haから、岩石（砕石）を10年間採掘し、最初の2年間は1日当たりダンプ70台、3年目からは大名沢に砕石プラントを建設し1日150台分を搬出し、線路の敷石や建設用骨材に使用するという計画が、東京の総合建設会社で計画された。

これは、林野庁が国有林事業の赤字解消を目的とした土石販売促進プロジェクトによる収益活動の一環で、事業開始には、地元住民、塩谷町、栃木県の同意と矢板営林署長の許可が必要なものであった。計画地は、ヒノキの原生林のほかモミ、ツガなどの天然林が群生し、県鳥のオオルリの営巣地でもあり、それら生態系の破壊、そしてダンプ等の走行による排ガス・粉塵・騒音被害など環境破壊は明らかであった。

このことから、活動を休止していた「高原山の自然を守る会」が、1995年12月日に会員493人の元で再結成され、反対運動が展開された。

その結果、1996年2月に当時の塩谷町長が「計画には同意できない」という考えを表明したことで、実質的な中止となった。



国会議員による現地調査の様子



高原山の自然を守る会設立総会の様子

NO.3 指定廃棄物最終処分場建設計画（今回の計画）

そして、今回の指定廃棄物処分場の問題。

自然豊かな山奥に焼却炉付きの廃棄物処理場を造り、そこに放射能を含む廃棄物、いわゆる『指定廃棄物』を集約しようとしている。地中にコンクリートの部屋を造り埋め込むことになり、その量を減らすために、燃えるものは焼却により減容することのこと。

焼却が終わればその焼却炉も解体し現地に埋める計画。焼却炉はバグフィルターにより放射性物質の飛散を防止するので安全だと言っているが、バグフィルターの安全性については諸説があり絶対に安全であるという確証はされていない。コンクリートの耐久性についても諸説があり絶対に安全であるという確証はされていない。

大気中に放出された放射性物質は候補地周辺の谷や溪谷を伝い下流域に流れていく可能性があり、そこには西荒川ダム（東古屋湖）がある。

また、現地は河川に隣接しており、候補地内には湧水もある。工事をすれば多くの地下水が湧き出し、現在の福島第一原発の現場と同じように地下水の処理に苦勞することが目に見えている。水に弱いとされるコンクリートが何年持つのか。ちなみにここに持ち込まれようとしている放射性物質は半減するまでに130年以上かかることが予想されている。このような難問山積の場所が適地といえるのか。

この自然豊かな場所が**指定廃棄物最終処分場詳細調査候補地**に選定されたことを**塩谷町民は納得できない。**



川の左側が候補地



施設設置イメージ図

塩谷町民は自然を代償にして町が豊かになることより、遠い昔からこの塩谷町に守られてきた自然を愛し、そこから流れ出る水を守ってきた。

この行動は下流域に住む人々への、上流に住む住民としての責務であり、決して裕福な町ではないが、住民の心を豊かにするバロメーターである。

そうして守ってきた水は、塩谷町の基幹産業である農業を盛んにし、おいしいお米や、花持ちの良いスプレー菊、そして味わいのある野菜を生んでいる。

恵まれた水を生かした産業も盛んになり、流域の養魚場では新鮮なイワナ・ヤマメが育ち、その加工品も町の特産品になっている。候補地下流の東古屋湖はトラウトやヘラブナ釣りのメッカであり、東北・関西方面からも釣り人が訪れる盛況ぶりである。80センチを超える大物に会えることもあり、関東一円では大物が釣れる場所として人気のある釣り場となっている。

また、全国名水百選の尚仁沢湧水（しょうじんざわゆうすい）を使用したミネラルウォーター製造会社の水は、東京圏内の様々なホテルやレストラン等で採用され、そのおいしさを多くの方々に理解してもらっている。

このように塩谷町は高原山が育む良質の水を宝にまちづくりを進めており、**この水を汚されることは町の存亡に関わる。**

だから、指定廃棄物の最終処分場を受け入れるわけにはいかない。

それは町民のためだけではなく、**塩谷町を源流とする水に恩恵を受けている下流域の人々、首都圏の人々のためでもある。**

ここに処分場を造らせたくないというのは決して**塩谷町民のエゴではない**ことをご理解いただきたい。

④ なぜ塩谷町民が納得できないのか

○ 責任者である国の説明がない

国は塩谷町を選定する前に、矢板市を候補地として選定した。しかし、矢板市民への説明が十分でなかったとの反省から、環境省は候補地選定を見直した。

なのに、今回の塩谷町の選定においても**町民への十分な説明がなかった**。ひとつ変わったことは、県内25市長の首長を集めて会議を開催しただけ。

首長に説明したことが町民への説明になるのか。**25人/約198万人（栃木県人口）に説明したことが県民への説明になるのか。**

矢板市の選定で起こした同じミスを繰り返しているため塩谷町民は納得できない。

○ 選定作業のプロセスがめちゃくちゃです

環境省は塩谷町に指定廃棄物最終処分場詳細調査候補地の詳細調査候補地を選定した後に、栃木県民に対して「環境省と考える指定廃棄物の課題解決に向けたフォーラム」を開催している。

本来であればこのようなフォーラムは、候補地選定の前に実施し、県民が指定廃棄物に対する知識や情報を共有して上で、栃木県民すべての課題であるという認識を深めるべきであったはず。

その上で、指定廃棄物の処分について、栃木県においてはどのように処分をしていくのかを県民が参加した開かれたテーブルの上で議論すべきであったのではないか。

指定廃棄物最終処分場問題の解決方法

一般論

課題解決に向けたフォーラム
(県民との情報共有)

↓ 県民合意あり

市町村長による協議
(栃木県の選定手法の話し合い)

↓ 県民合意あり

選定手法についてのパブリックコメントの実施
(県民との意見摺り合わせ)

↓ 県民合意あり

栃木県における選定手法の決定
(県民への情報提供)

↓ 県民合意あり

候補地選定結果の公表
(県民への情報提供)

塩谷町

市町村長会議の実施
(選定手法の説明のみ)

↓ 県民合意なし

選定手法の決定
(環境省)

↓ 県民合意なし

候補地選定結果の公表
(環境省)

矢板市

選定手法の決定
(環境省)

↓ 県民合意なし

候補地選定結果の公表
(環境省)

選定手法の見直し!!

県民の合意なきところで議論された内容は納得できるわけがない。
行政の効率性の都合で進めた結果に県民が納得するはずがない。
ここが、今回の住民コンセンサスを得る上での最大のミスである。

⑤ ではどのように解決すべきなのか

○ 現状の一時保管場所を強固化すべきです

当初、環境省や県は指定廃棄物の一時保管場所の脆弱性や危険性を叫び、早く県内1カ所に整備することに躍起になった。⇐**その考えが問題解決を長期化させていた**

しかし、時間の経過と共に

まずは、一時保管場所の安全安心を確保するため保管場所の強固化を図る必要がある事に気付いた。⇐**これを優先すべき**

そして、平成29年7月10日に一時保管農家を抱える関係6市町に対し、

各市町ごとに1箇所又は数カ所とする暫定集約保管（中間処理による減容化・集約化）を提案

⑥ 塩谷町が取り組んできたもの

○ 関東・東北豪雨の爪痕の検証（国がやらないなら自分でやる）

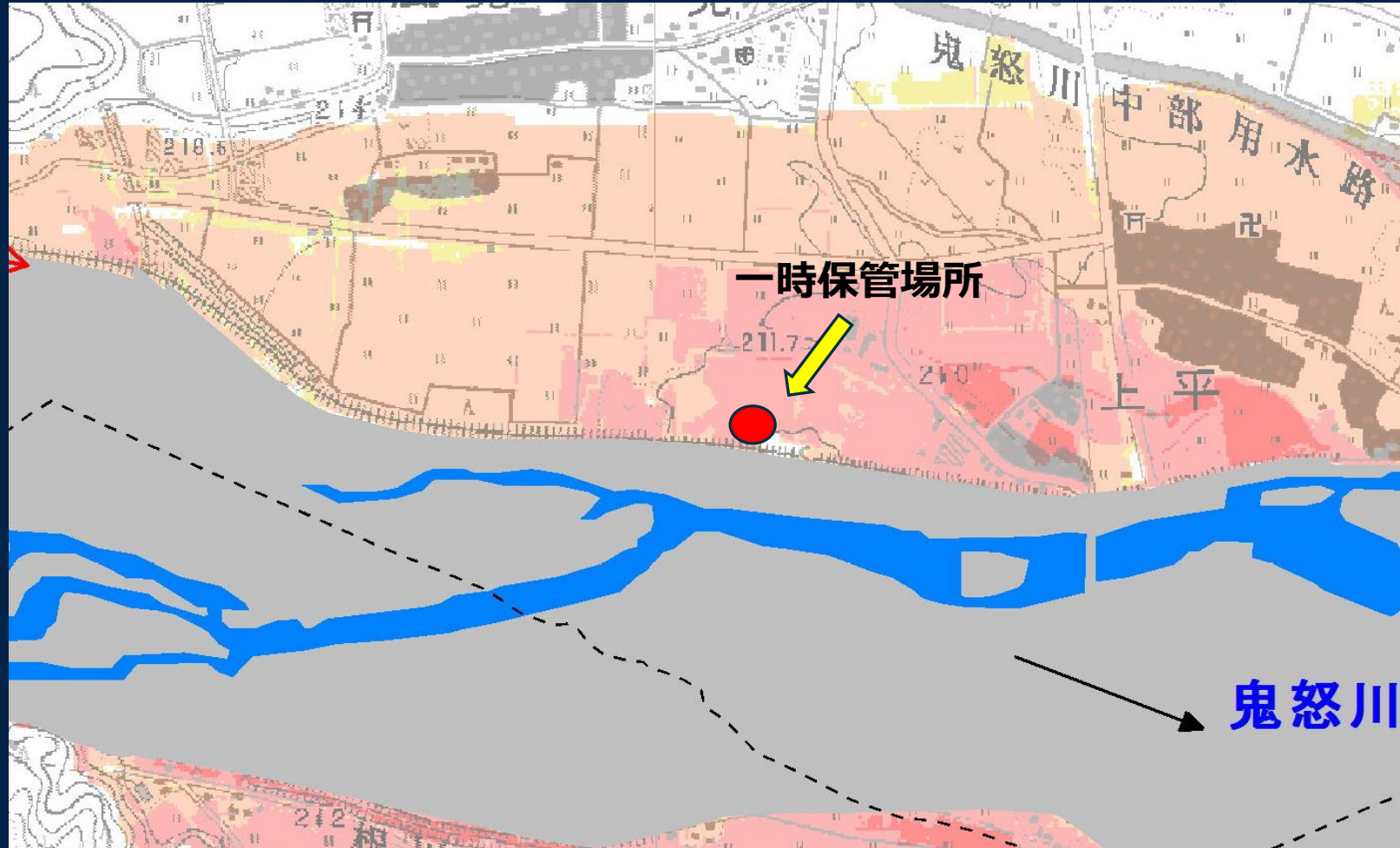
関東・東北豪雨は塩谷町にも大きな爪痕を残した。そのひとつが詳細調査候補地の冠水。

安全であるという理由で選定された場所が『冠水』した。塩谷町は町民にこのことを報告し**平成27年12月7日に環境省に対して『指定廃棄物最終処分場詳細調査候補地選定結果』を返上**した。

しかし、環境省はいまだに返上を認めようとはしていない。



また、関東・東北豪雨を受けての、国土交通省が行った**鬼怒川の洪水浸水区域の見直し**においては、塩谷町の指定廃棄物一時保管場所が、**鬼怒川が決壊した際に、3～5メートルの浸水が発生する場所**であると指定された。



○ 指定廃棄物の一時保管場所の強固化を要望

現在、塩谷町は環境省に対して一時保管場所の強固化の要望を行っているが、国は様々な理由をつけてその要望を受け入れようとはしない。

具体的な手法としては指定廃棄物を**コンクリートボックスに詰め替えて保管すること**を考えている。

長期的な保管を考えると、ベストではないが、将来的な移動も考慮考すると、ベターな方法だと考えている。

《改修前》



塩谷町町有地内での遮へいシートによる保管状況

《改修後》



福島県内の公園でのコンクリートボックスによる保管状況

⑦ 解決に向けて、今、やるべきこと

今回の指定廃棄物最終処分場詳細調査候補地の選定については、先に説明したように県民合意、町民合意を得ずに進めてきた、民意なき選定。

今、やらなければならないことは議論を原点に戻すこと。

国民・県民・町民に説明責任を果たし、指定廃棄物の情報をみんなで共有し、国や県の問題として考えるべき。

決して、塩谷町だけが考える問題ではないと思っている。

この問題で**苦しんでいるのは国ではなく末端の住民。政治や行政は住民を救うためにあるもの**。一部の人間だけが苦しむような不公平な社会はあってはならない。

少なくとも今、指定廃棄物問題において求められているのは、**国の責任と、国が行動する勇気**である。

⑧ 結びに・・・学生のみなさんへ

今回、塩谷町が指定廃棄物最終処分場詳細調査候補地選定されたことにより、塩谷町の住民は**多くの事を考えるきっかけを与えてもらった。**

今までは国や県が決めたことに従えば間違いがないと思っていたが、それは大きな誤りであった。

自分たちで学習し真実を掴み、自分たちで行動していくことがとても重要である。

今、若者の政治離れや無関心が叫ばれているが、無関心では自分たちの未来を切り拓くことができない。

自分に何ができるか、自分が何をやるべきか。真剣に考えてもらいたい。

そして、**自分の考えをもち、実行する。それが未来にきつとつながる !!**

塩谷町が学んだことからの学生のみなさんへの応援メッセージ !!

みなさん是非一度、
自然豊かな塩谷町においでください。
お待ちしております。

ご静聴ありがとうございました。